



東海道名所圖會四

ル 3
376
4



江戸
276
4



東海道名所圖會卷之四

目録

龜桑山 佛堂 秋葉權現社 多宝塔
 白山祠 天淵宮 鐘樓
 奥院 七龍 京丸
 名老葛布 已等麻知神社 日坂
 子育親寺 四郡橋
 菊阪 牧原 諏訪原古城
 淡嶽 阿波波神社 無向山親善堂
 敬滿神社 大井河 駿遠兩國殿
 瀬戸 名物條殿
 蓮生寺 岡部 藤枝
 丸子 名産盆石 那閑神社
 古枯表 建徳神社 建徳寺 用宗古城
 建徳寺 建徳寺
 神樂堂 經堂
 掛川 神樂藏 櫻井
 佐和中山 板石
 菊川 夜傍
 初倉山
 金谷
 嶋田
 田中城 葛細道
 宇津山 葛細道
 手越 手越古蹟
 繁山

石原

安部川 彌勒桑屋 ○駿府
 賤撈山 漆間社 糸山
 清水 名産の陪茶 足久保親吉
 焼津神社 草薙神社 楠大樹 杵形録
 姥ヶ池 有渡濱 久能山
 三保松原 御穂神社 羽衣松
 瀬名川 庵原 廬寄
 清見関 清見寺 清見川
 石浮屠二基 佛殿
 清見寺十景詩 舟山堂 龍虎画
 古奴吳濱 岫寄 甲州身延山道
 薩埵嶺 足利尊氏直義古戰場 名産栄螺鮑
 浦原古城 ○浦原 豐積神社
 富士川 富士川
 由井

富士川 古家川
 漆間神社 曾我兄弟赤倉 虎御前赤倉

秋葉山
一鳥居



松平

四
貳



八里半

松本

稲葉山社
わんそんのやろ



四ノ三

大登山秋葉寺

越前周知郡大谷村山崎あり 權宗曹洞中興先階和尚
同國久野村可騰齊不屬也 天正年中再建

本堂聖觀音

十一面觀音 安ん 俱不同他
長三尺許 基大士の彫脇士勝軍比藏

秋葉山権現社

本堂の側あり 祭神大己貴命 或云延喜式内
高山鎮守といふ

三尺坊

秋葉同社 多寶塔 秋葉社の側あり
高山護神といふ

禪堂

本堂の側あり 白山洞 本堂の北
右あり

天満宮

本堂の北 鐘樓 秋葉洞の
左の方あり

檨織井

本堂より八町許 一石居 坂下村の上あり
高山の名泉

二鳥居

一石居の上あり 額 最勝庵 奉勅歩門八十三翁方面山言
ふれより

奥院

本尊不動明王 傳教大師 龍頭山と号す 本堂より北の方
之里許 奥の山 峰 好人 結界あり

夫高山井寺親と原に舊記見へば 慈云云ひ 元正天皇御宇 長老
二年小僧正の基 諸國巡りの時 高山に登り 老杉を伐て 聖觀音を 携軍比藏

十一面大尊のそ像 三軀 彫形 布して 國家安民 五穀豊饒の爲 小僧院に
奉創し 一くふ之件 安ん 傳聞行基大士と文殊菩薩の化身と

天竺婆羅門尊者 來朝相見の時 權者より 事い南都東大寺に
記傳小鮮之爲 寺の鎮守に 神に延喜式内 小國神社と号し 神躰大己貴
命とれと秋葉権現と稱し 一山護神 小三尺坊と同社と犯り 靈人身
の附と信州の産と 其母乃小觀音 若信ト 普門品に 稱する 奉教百
卷小速小或我れ 妻小大慈三十三身の中 於て迦樓羅身 現れり 仰て 是て
妊體ト 臨月小到り 福徳赤満の相ある 男子 誕生 父母 斜に 依依ひ
成長 小從ひ 出家 せり 後 國藏 王堂 十二坊 中 三尺坊 小住職 せり
此時 不動二昧の法 依り 一七ヶ日 小八子 牧 八千夜 八千夜 八千夜
執り 一々 満座の 曉 燒香の 火 烈々 として 燃上り 鳥形 兩翼 小して
左右 小劍 索 依 持 せり 亦 相 現 せり 心 依り 法 成就 せり とも 依り 一
心 小觀念 せ 忽 煩惱 業 生死の 苦 患 滅 盡 して 飛行 自在の 神通 を
得 然ら 二つの 白狐 出現 せり 一々 尋 小れ 小素ト 何國 せ 止 小ん
所 小 依 依 して 度 生 利益 專 小 せん として 誓ひ 虚空 依 依 依り 一々 依り

此秋葉山小白狐と傳ふる因茲より安住の嶺と名を幸ひ基土士の安のふ大悲行尊像をせしうばちを禮ね供養しつゝ其の行基開基を老二年より九十年以後して 送藤天皇御宇大同四年此寺の其後弘仁二年より諸國に遊化して普く庇生利益せんとして壺嶽壺窟に飛びしあつゆら名山名蹟とせりゆの其星相獲りて四百六十餘年以後 依見院御宇永仁二年八月中旬小本此秋葉山嶺小歸峯のりあつと大登山と稱せり南海の汀より此寺を攀登りて山此軸際より又五十町とせり標相の併地不到の入路十住十行十回向十比昇進して修し坐り階級四十二位と修まるは儀之上八町と四方四隅の菩薩文殊 普賢 頂上の別八葉に蓮葉を併位と表せり又秋葉寺と號せり上古此山小水乏りりり寺傍秋葉を鎮護の神社(祈登)ぬれを二天坊神勅に蒙りて天龍八部に招法しければ多應驗ありて霹靂震雷一一夜の中に西山の隅小あつりて清泉涌出りり時

人歡喜踊躍して水中と見れを潔白の明珠二顆あり是蛟龍領下の寶玉之又蝦蟆步て背面小蘗葉の二字頂と遊此來り因茲寺に秋葉と號ひかの龍土玉の今小寺鎮して寶庫小藏む蝦蟆の布水底小入り身之加加之の清泉此より小寬永年中山姥坐ありて機と織をれより水と機織升と号ぶ其織る布に青銅十疋派副て住職小賜るあれ又今小寺の寶鏡と名機布と住職乃涅槃衣と名實小不心蓋の壺水也(大旱の時雫をれを忽膏雨降る是龍神感應の名水也秋葉山畧傳記大槪のくの)古縁紀舊記等と亨禄天文の間甲州武田信玄が騷擾小罹て兵變れ為小焼亡し只秋葉神社觀音堂終小遺り寶品を寺僧推乃く逃免るゆへ今小本を甲州乱妨の軍勢堂社に焼掛らんやて救多の火災のれども棟上より白水流れ出て火災を免るあれは應驗著しつれを近年都鄙の素俗暑寒と婦ら

秋葉の道く
 石赤村の
 溪川小推棧と
 多く之双へく
 推草と他ふ
 白ひよく
 は地の名産とん



鳳来寺より
 秋葉山まで
 八里餘みか
 山嶽之其中の
 大野といふ
 雨の女の旅人
 の若狭
 岩屋
 坂路と
 やらり
 ゆき
 世に
 洛小夫
 婦人
 比せん



そめ紀の
しものもさつと夢の鳥居一後あり一また其神も入をせしと
らつてひつつけられ

貞應傳記

山口といふ宿にこれありて今も通せり登原山に
むとていふ一ありて一は分平の位と申す是後此地を
志は伴地といふはりん薩摩中をいりん中丹と申すはわられ
ゆへ一と身もあつた後身もあつたふとていふはりん
とも恋一くもつていふはりん願ひを申すは
納受して眞實不虛の感應とされたる

曙記

おのほれをいりて
み光るを神にまかせて
入坂を越むとていふ町をいりていふは八幡宮あり花表小幡のりぬ

都坂をいりていふ町をいりていふは初様々の業これ

たもあふ神は花表初をいりていふは外よりとていふ

天文四年三月冷泉大納言まゝ久のふ記

日坂山口といふ町を申任といふ社とて一拜す

大井川をいりていふは冷泉

和漢年代記云 欽明天皇十六年乙未二月大己貴神遠州周智郡

日坂

ひ所の民は日坂をいりていふは

こらび録といふ其名あるもの或い葛の粉をいりていふは

粉をいりていふは

餅といふは

人もありていふは

婆呼魚子婦喚供停人鄙食在途中
憑誰救得西山餓馬首吹來餅餅風

佐々木中山

長寺

幸ふけい

又ふけい

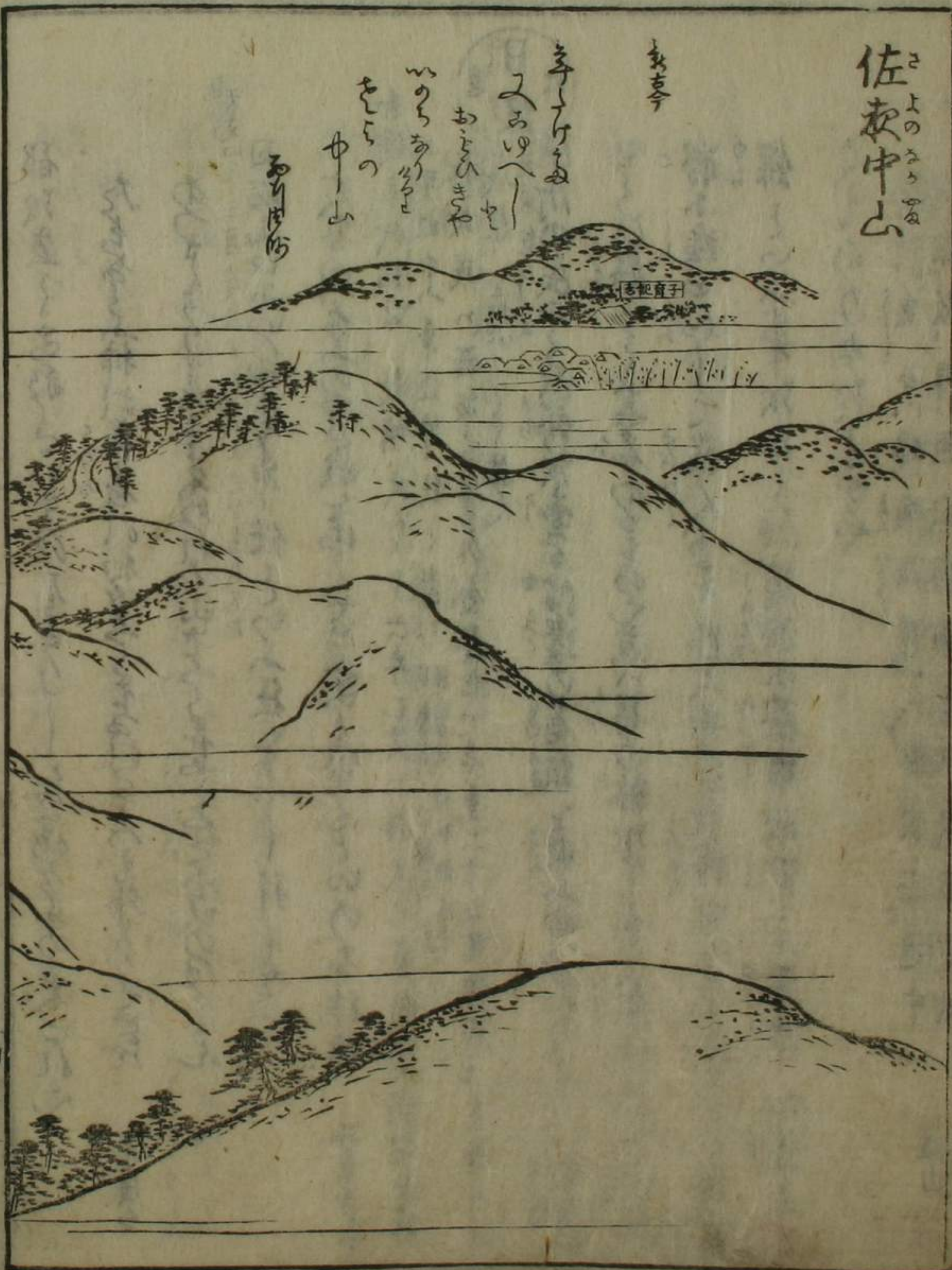
おまひ

わらわら

まじの

中山

あけ



々らふ

様

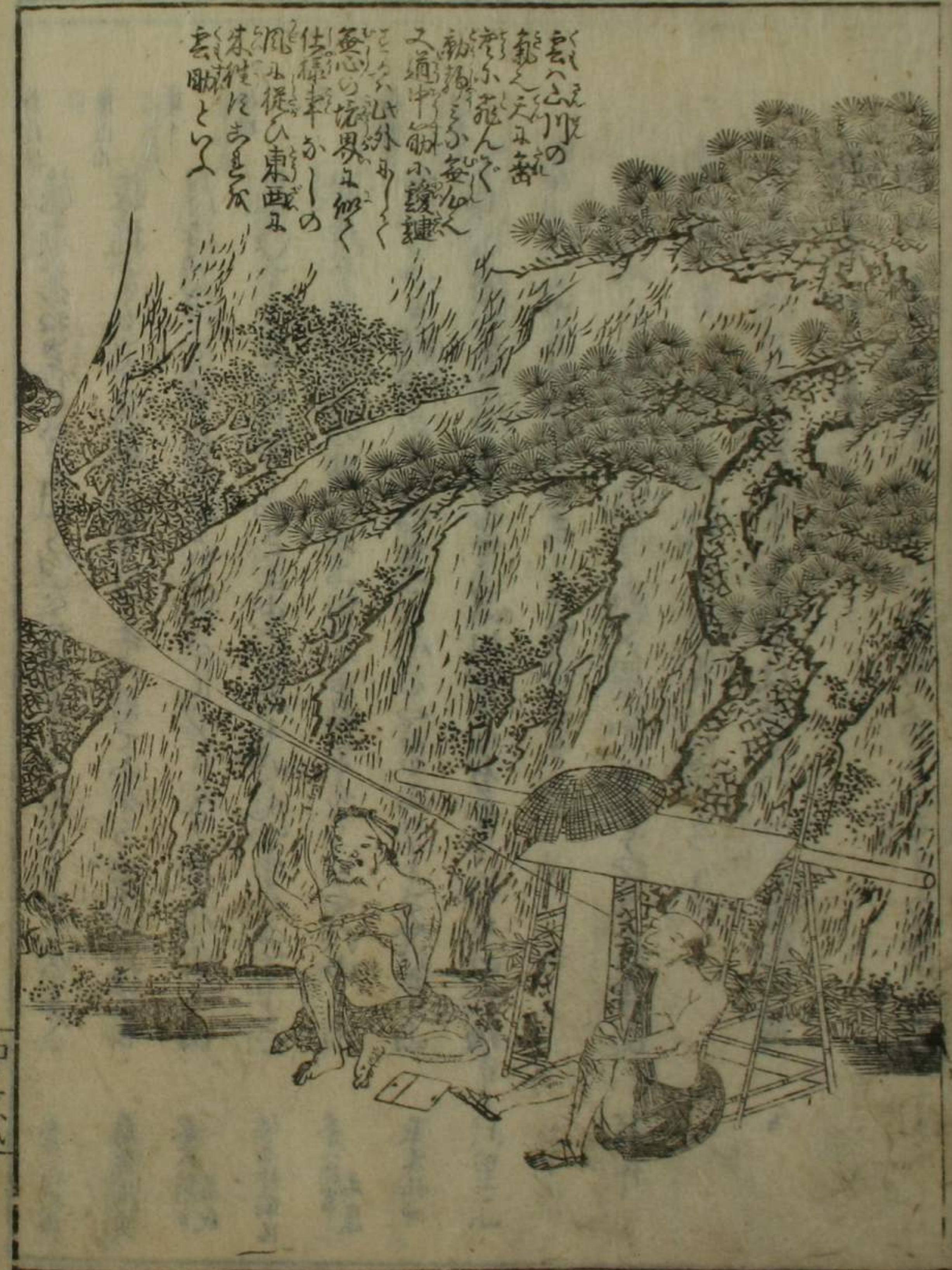
おせ

郭

俗園更



雲助は何者更非
 雲助兒尋昔元歷
 歷如何今此姿一
 朝蒙勸賞十年受
 艱難踏躑體能固
 至秋肌每寒如古
 解道咽坂東酒添
 身難瘦我非病雖
 壯唯是貧袖壞時
 自見裾斷足沫輕
 徘徊街道筋欲拔
 生馬暗夜宿建念
 寺月當勝肩憑偶
 雖一盃受未見在
 所松莫謂吾無舍
 幕天坐太平一本
 有竹枝萬里可
 橫行



四ノ十貳

雲助行

雲助は何者更非
 雲助兒尋昔元歷
 歷如何今此姿一
 朝蒙勸賞十年受
 艱難踏躑體能固
 至秋肌每寒如古
 解道咽坂東酒添
 身難瘦我非病雖
 壯唯是貧袖壞時
 自見裾斷足沫輕
 徘徊街道筋欲拔
 生馬暗夜宿建念
 寺月當勝肩憑偶
 雖一盃受未見在
 所松莫謂吾無舍
 幕天坐太平一本
 有竹枝萬里可
 橫行

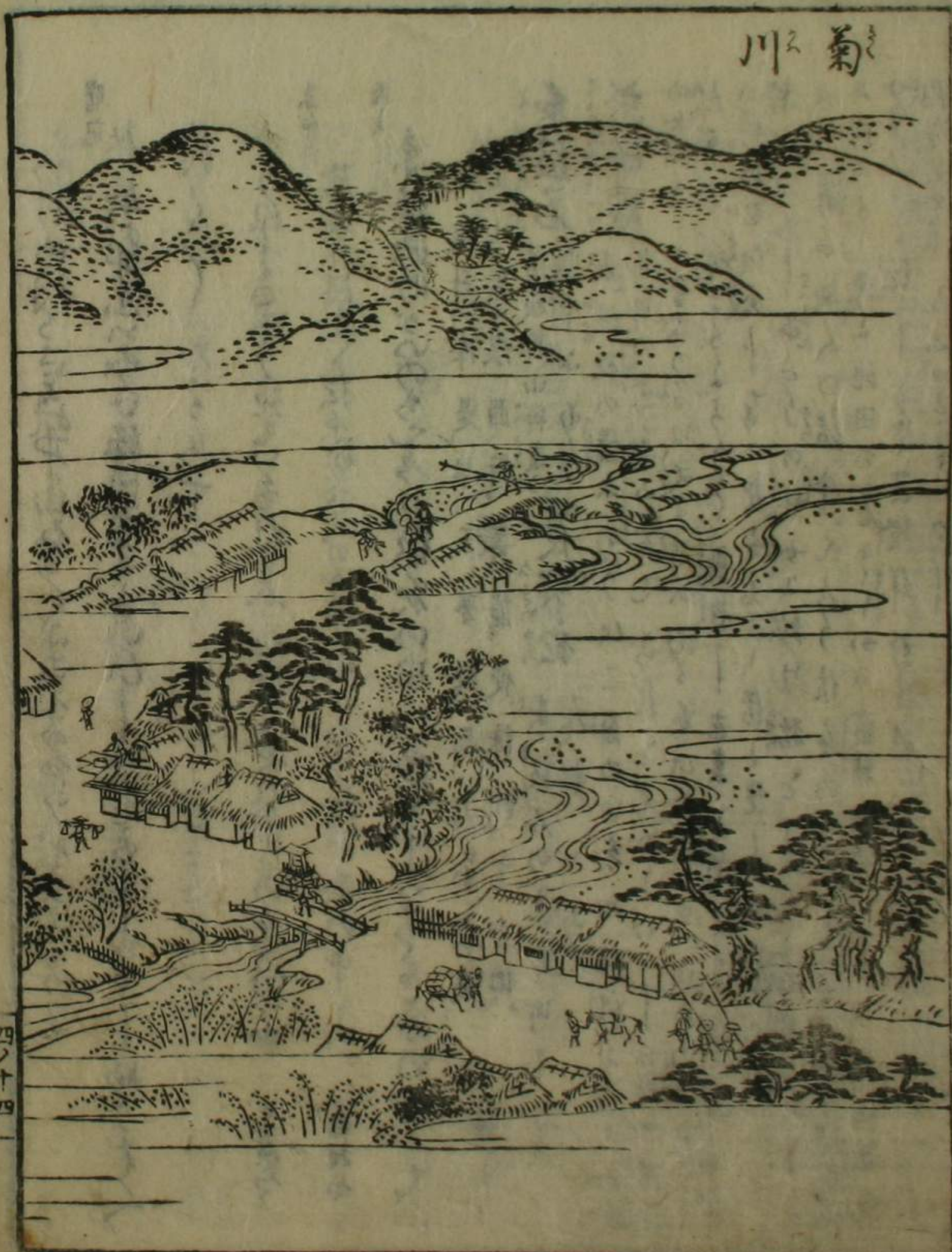
銅脈



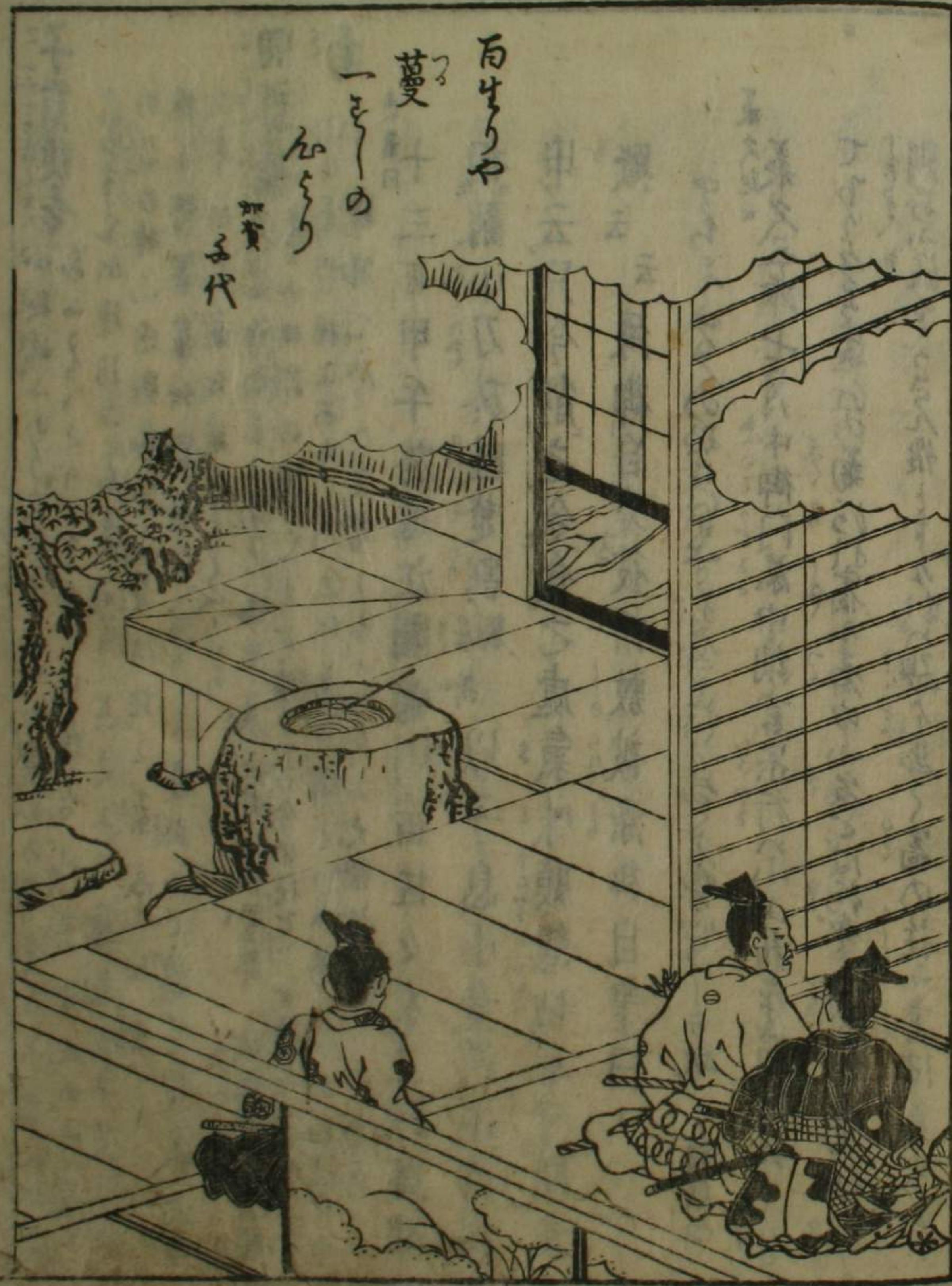
雲助行



道の邊り
孤北
信左
唯夕



川 菊



百生りや
蔓
一まの
心より
加賀
子代

菊川宿

中門宗行のちのちの
乱れ不潔舎を擁れ
東心下りかへは菊川小
宿を菊水の下流子
敷を延々と菊川のちのち
命を滅とていへ対句と
ちの隙ふふ若遺これ
一平謀者よこみへり
かの晋の房より外壁を
信どく三郎が
殺せしめ
比せんか



浪連春泉画

子育親吉

あふりくへ境内ふあり久あ寺しつゝ真言の草堂し子育の由縁
天の守くは境内ふ石表あり其文ふ云慶長五年閏ヶ原
の役の時山内對馬守一豊は地ふ系亭に營く
國初將軍家飯饗應一なり一遺跡くと傳と近年之明
九年は石表改建ると云ふ

四郡橋

久あ寺のふあり高岡 秦原郡 佐野郡 城領郡 山名郡
等々の四郡の境こども按ふ古今の様とて傳とあり

菊川

菊川村ふあり川上飯菊ヶ淵といふ菊川村むりの
驛場こ今い支場とありは所ふ久根飯治今ふあり

東鑑曰

十三日甲午於遠江國菊川宿佐々木三郎盛綱

相副小刀於鮭楚割 以子息小童送進御宿

申云只今削之令食之處氣味頗懇切早可聞食

歎云殊御自愛彼折敷被添御自筆曰

予ちえする人のねさけすをすれりありある心さうらぬ 頼朝々

兼久記云

兼久之年七月中御門系中納言宗行小山新在御門尉具一

てりるる遠江の菊川宿小着のふまとははれと向中と菊川と

則ふ流るるえ惟と中たれば礎とあく宿の柱ふ書はあゆふ

昔南陽縣之菊水汲下流延齡
今東海道之菊川宿西岸亡命

光仍記

菊川と云ふありさうふ兼久之は秋の法中御門中納言宗行也

少く人罪有く吾妻下られ多小は宿小泊りするも昔は湯縣

は菊川水下流と汲が齡松のふ今東海道乃菊川の西は宿小泊りて

今孤うあるやある家也陸子小書れりるると少とたればあられ

少てその家とあらし火のあめふ屋けてたれとゆとねうや

者あり今いののさうりともこのあうとさうん形見え化と成ふ

るる我はうるえせのあういとと存ふらうり一ま終

書はるる形見を今あうる季あふふと勢とをれつひん 兼行

胡馬の光はれれ日鳥翅さうりねれの兼命とありんかう光

菊川の着ふとありね或家のう一兼不故中御門中納言宗行やかく

書付られり彼東陽縣の菊水下流汲が敷とのい東海道の

菊の西岸ふ中りて命と令くせんとなふにあられらそあふられ

貞應海三記



梅嶽
ひらけ湯
経の地獄
猿鬼

湖夕

日坂



阿波ヶ嶽
阿波神社
世に無間とていふ

赤澤集云
右の方道より秀ま
り波がよけと
ち修の所并
是より一
空まろく
茶臼雲の
ちいさ
あはれ
あは

直洲

四十八

本徳

穿し舟をぬきひくワのひかひかしくいふことやいとさる
形りあのみそたらんおもひけとてさうりゆ

まのり記の
さひ出る都のこころあはれいふ歌の存せよ及一 万葉

あしうちの舟はあうりぬる奥より大井川とてワとてそれら
たるくこゝろあはれいふとちホ一とちあはれ流れ別れを
いぬともやあく入ちくひさるふゆり中しくさうてんんり
もと飛あめりあくはく覚ゆきのあのみちんてんてんたれん
龍田のあうりひどもさうり一やすうりぬ

日教のまひのあされい大井川とてぬ水もつるさる
まのり
大堰のさうり都ふあり一名はさく飛山殿の行幸れ虎の

山は花盛り龍頭鶴首の船に乗持歌管絃の宴小侍一舟も
今うの再び見ぬあめとのあはれとあひいはげけりよ

東武記の
津と瀬ふさひのさうり大井川の心れをぬはぬ一 万葉和南

駿遠兩國燬

大井川の半の遠州半を駿州へ進ま下流西の方へ流て
丙辰紀の
大堰の駿河と遠江との燬之明日香川ありと霖雨を瀬瀬の

る事なびくあれ東北山の岩流れて徳田の驛河原の中にある事も
あり西ののさ流る金谷山小井も事もあり又一まのさのさのさりて本
沙石流を事もありあまは枝流とありて一里をさうり間ふつる半
とありこれとあり一たり徒杜壘梁とありつる此ゆは往來の人馬河の

瀬とありこれに金谷小待もあり徳田小やまもあり流りのあて弱る老
もあり辛か下て向ひの岩小至るも徳田金谷の民ちのが家とたどひ流る
れとも旅客の囊流むさほる由ふ流水と枝を賣炭翁が草衣ふして年々寒に

と待たさうり河水に家流流一田と換ふゆ防鴨河使防葛野河使孤
垂れ一むり一さるも口とあひい出さうりんや

羅山

。尋常揭属心過腰叱馬呼奴魂欲銷
來往就中何處苦無舟無筏復無橋
。海道奔流第一川盤輿昇載擔夫肩
洛西大井雖同稱此不着持彼有船

大井川

大井川

河

石

信

湘



田

あつま

大井

い

家

あ

西

い

さ

泰



大井川
繪之圖

旅客馮陵慎涉過
橫天湍瀨急頽波
水光倒走中山樹
石勢轟流大堰川
决口年年沈白馬
防堤處處卧蒼蛇
早知夏后行無事
安得成功濟世多



乙卯仲夏從東閣
歸路憩嶋田驛長
大久保氏家主人捨
大井川渡其苦忘
殆厚矣
心之所向
乃の上り
室之邪
新岩



されを大堰川と東海道第一の急流に大いふして薰風もみひびき
傾く穴所吹ぬればあちち舟舟多く揺れ橋無ふしてゆき
舟人も鴨田金谷に川筋所ふた寄て舟川の定先を喫て其賃取に
別着とあちち渡下小艇さう心運着肩車を此取あてて交易の賈人
京宅里吾妻下里伊勢まじり富士宿をせし八人の巻の巻ふくれ又肩
車さう渡りあり相撲の園取の人と雇は自丸襦袢版て土俵入の如く
ワラもあり水勢ちつちさ方そん波を右別れ舟郷相の雲客烈
園の猪度ハ駕込巻居て多くれ役まぬりて昇波に水堰の備まら後
小園ハ急流小足込掛聲込合く流に紅葉あつ時取まらぬ水落
冬川の寂し水渡下ハ弱里みるさ極ま夏河と質ふ入りしりれ少流
羅山子しりるあく己が茶の戸ハ流るれも首さけの借録を納して
八月雨の水威と傾く下り酒の流と輝く所々小宴は鴨田金谷の渡下都
て七百人ハ霖雨降止ぬしてみさ極ぬとどけ止ま東門驛中所

せくまでさうり一驛二宿も跡へ残りて水は流るを待もあり又急流より
流るそる枝(歩もあり)あはけは先小安部川富士川酒匂馬入六
郷さうり川々ありみるされ小准へ淮南子小水神天吳と云
又水伯ともいむしうけは河小至て接連ま志半れ旅人もあれら
神の機嫌は獻くあるさぬ身はるへ後白河法皇の所頼
鴨河の水と雙六の塞とて朕があはれ小俵がはと作せられ
しも同日の論とぞさられらる

嶋田

藤枝まじり武里八町は宿小大井明神とて此所の生土神あり例
九月十五日あり宿村は所旅所と云
風雨頻来宿嶋田家園万里思范然
通宵漏却却柳樹滴坐到天明不作賦
山崎關齋

岩はしきさうは流のぬまは通ふ初は花を打てさう
冷泉村々
瀬戸山とて又はゆるりふ
瀬戸山とて又はゆるりふ
瀬戸山とて又はゆるりふ



離法寺

早瀬相法師

山吹の花乃

深飯

喰ふ

少中

そとど

ふらふら

名産
瀬戸深飯



畧記
畧部乃いまもくぬきなるゆかて山は松のげふまよりくつれいひを
その出なる小麓すこぬくちりふひ花よりくまれまゝあは
後よりもうすさたてにさむくちるゆ

それとこのまのまはけこ思ひあはれおぼしむとあは
岡部の里に櫻一本咲くはかみん

あさあけとあはらうと一とあはれはさうたあはらうん
先度郷

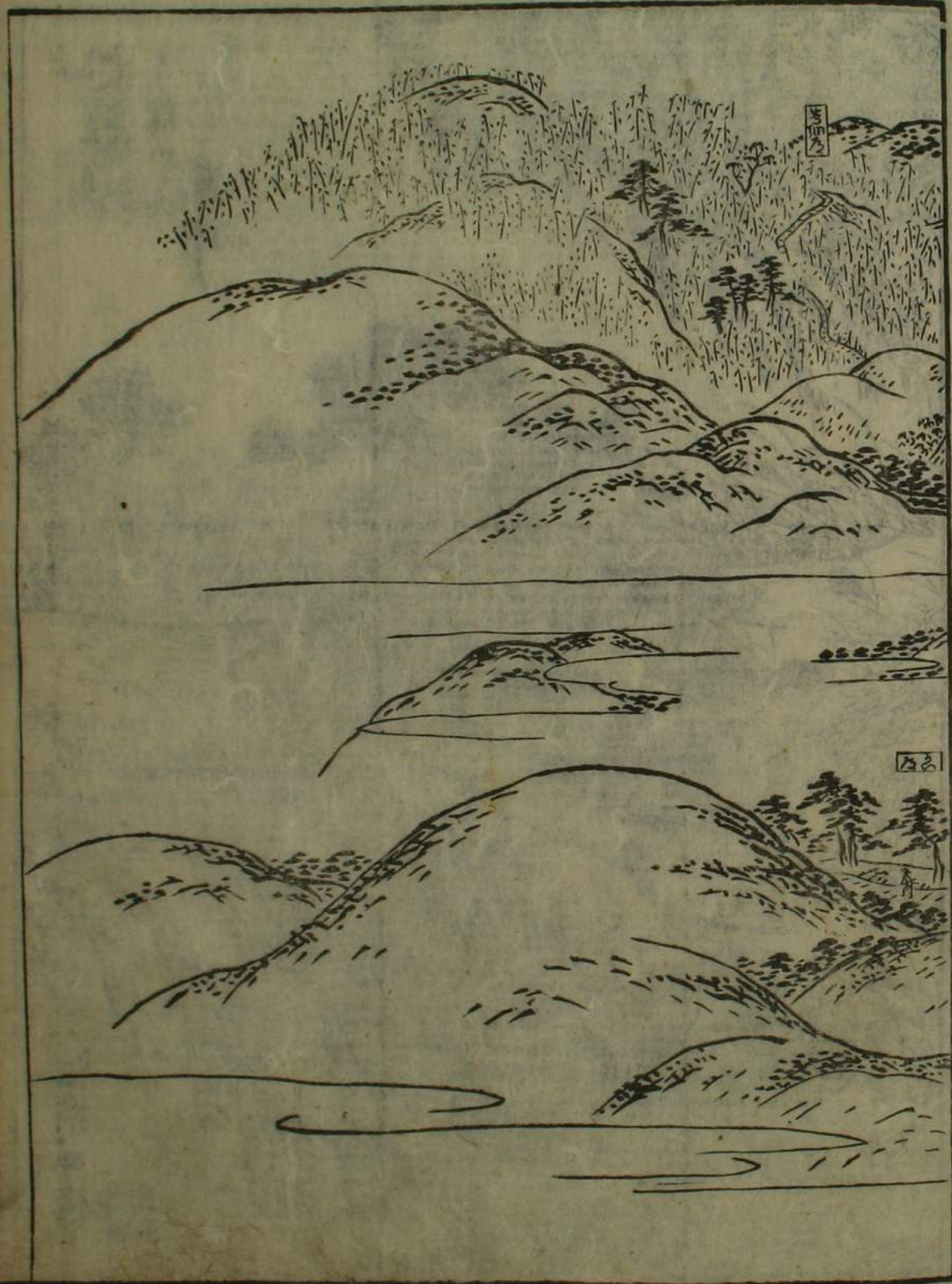
那閑神社 延喜式内今土人虚空蔵と称す

宇津山 宇津の谷崩すこり里赤石鈔肉屋郷有度郡とあり今安信

郡小属は石坂小西行山最林寺とあり西行の妻を伴とす
千手観音は宇津の山あり海邊とあり右の方小狭道ありされ古の
豊太尉小田原攻の時解勲功ありとあり宇津の川氏といふ者あり
領人今小傳志一と家室といふ
葛細道 宇津の山あり海邊とあり右の方小狭道ありされ古の
所の者武人業内者といふ備ひといふ狭道といふ者あり
業内者といふ二人藤原氏といふとあり藤原氏といふとあり
道とあり業内者といふ二人藤原氏といふとあり藤原氏といふとあり
中へ路路所なくありとありとありとありとありとありとありとあり

夫宇津山葛細道も勢勢小歩くふと一より其名高く古跡多く上方

よりあはに至るは岡部村驛より海道迄を里許り多湯谷口阪下といふ
所ありこは算取地蔵堂の向ふ有熊野権現の中よりこれより右の方入るとえ
より道細くいさむる溪川ありい流石右流左つれは石橋五つとあり
坂路小ぬれをいさむ道細く山流りて幽寂とあり茅さくは萩萩藤藤
生茂りては蔓蘿のつづ足小橋といふ薔薇荆棘袂と閉く歩く
二人のふしの着鎌衣とあり叢と薙刈と次方小歩く小路峨とあり
杖とちりふりふりたつとあり所ありあは神社平とありむとあり社あり
古蹟とあり教ゆ按むる小駿河瓦土記小宇津谷本原神社の
仁徳天皇紀七年乙卯所祭やとありあは神社の古跡はらん古あは
其上方に猫石といふあり古松六七株は陰小猫は即ち形小似る巨巖と
それより又出るは湖頂嶺とありとあり所小歩く山郭依とありて代本は



宇津山
つとのやま
茗細路



玉葉
 右の山
 若くは
 山
 中智宗
 親王



宗尊王
 右の山
 通り

法橋中修



連歌師

宗長の古蹟



丸子

駿府中へき里半 東鑑云文治五年十月廿日平太綱宗小治て
内所と驛舎小せん 半 願ふ頼朝々許して散位親能小余ト
後奈良院の勅願所也

名産盆山石

丸子の名産 盆山石 市店ふ出して沽之又暮漬汁
冷泉馬村々

梅名菜丸子の名産也

丸子の名産也 梅名菜 丸子の名産也 市店ふ出して沽之又暮漬汁

連歌師宗長古蹟

九子の西口六町許花の方泉谷小あり天柱山 柴屋寺と
禪刹と宗長柴屋軒といふ故小寺の名とせり

柴屋軒宗長法師ハ 後花園院所宇支安五年駿州島田邑少て誕ト

初して叡智たり関主今川上総公義忠これと愛して左右小近仕さる半
三年十六兼也て上洛一宗祇法師小竭して連歌と學び廿八
兼也て蓬髪一醍醐普捨院少て蓬頂と遠紫髪一休和尚の禪扉と

敲く四大本來空寂悟り大徳寺山門再興小力と竭く縁松暮く風推小
道遥一諸國小遊ふ明應四年宗祇法師小勅して新築波集松撰以其
中小宗長其陰二十八句あり永正九年今川氏親の招信ふよりい泉谷小
ト居一菴松結び自柴屋軒と號一風流と号して常小一節切松
籟て老松狼ふ閑居幽邃小して西の方小天柱峯聳へ東の方小吐月巖
の法輝鮮小して在中に水松湛ふまれと七星池といふ曾て在ふ此凡
通宗長の好みして庭造の法松洩と老松枝垂く風の音濃
あり永正元年初くは廬小住かみ附

山櫻あのみ色流ふの暮さう那

宗長

終ふ享祿五年壬辰三月六日八十五歳小してふ小寂以寺小墳あり新撰
は騷人懐舊れり松原備く建ふ事多し書院小什寶あり宗長
持念れ大慈悲考像人磨け画に蘆屋釜一節切を管銘松残受
とよぶ連歌百韻同新式偈小宗長の自筆同影像と特筆未考

信の宗祇法師の彩々青山百助成眼れをぞれをあつと風雅の
名蹟ねれをぞれ旅人道松枉く古松慕ふ英風を欽く嘆息れ
やもづりも多かりに

嘯月亭

藁品川の支流依波川とつありは橋の西より右へ入れを小野
法師堂よりは寺の書院松嘯月亭と名ふ富士山麓中ふ

手越古驛

凡松真妙の安部川とつありは松人眼下小遊りて
手越古驛の松奇はりよりふあり一もや

旅人の松河系松の竹駒も足るをやいつと朝立

堯孝法印

子系系遺蹟 松河系松の竹駒も足るをやいつと朝立
中將重衡因れは孫舎ふよりあり
はつとの名とばわといふをうんと向ふへを野誓女申なるのあれは
の松れ長者が娘とて作が眉目安心様も優ふワリをさうのさては

二三箇年の依殿ふ召置れく依名とは千壽あり申まは夕雨
か一際てよ所の物寂しげなる折原千壽琵琶琴を持せて参り
角て夜も漸更く公れまむきにら邪思ひもや吾妻ふもゆる優
ある人の有るよ其の事あても今一聲宣へば春前まで一樹の
陰ふちり途同し流れ狐結ぶも皆是先の雪れ焚といふ白柏ふ狐
藏小面白う親ふら久れを二位中將も燈圍しての教乃 虞氏が
涙といふ朗詠狐捨せられたる 中畧 其後中將南都へ渡されし斬れ
ぬひぬと聞へしを千のあひ中へ物ふひれ種とや成ふらん聽て
様とて濃墨深ふ窠れ果て信濃國善光寺ふりひ澄しつきの
後ぞ其菩提と吊ひたる我あられぬる

手紙の原合戦

建武二年十二月新田義貞大別駕坂の戦ひ赤勝
て手紙の原合戦に系小押寄り謀め一隊一隊川海されし川
午の赤れ始り西の降り中で十七夜中を戦ひたり赤ふ入られし故
味方若小人馬孤休先の狐舎で無火狐焼初めの月雲ふ隠れし夜
陣ふふたれを義貞の方より兎竟の射ひ狐をくりて殺の法より故の
陣ふふたれを義貞の方より兎竟の射ひ狐をくりて殺の法より故の

古枯社

安部川の上葉林川の丘山あり
森の中ふ八幡宮をせゆ

新古今 昔佳ぬうのゆや人の秋は道お身とあはれ杜れ下露 定家

廣拾 秋は道お身とあはれ杜れ下露もたまたま 正三位兼右

新後拾 人志れぬお身とあはれ杜れ下露もたまたま 俊成

新後古 け頃もあも耐ぬも耐ぬも耐ぬも耐ぬのゆりれお身と 雅永朝臣

丈夫 中々まて今のかさうれ秋の色いとみぢふお身とあはれ 安部朝臣

後葉 ころしはゆり乃下さ風をそ人のあはれを生れひふたり 定家

小紀 阿部川と渡り西より東流く本枯の杜と西ふるも名高き名高 定家

馬車輿の
 ちんちん
 道中と
 四十八の
 外此
 深足
 班外



安部川
 あべがわ



四十八

備古

今物これいふの衣冠たりててまづとて山小まのふり

後法華八道
大及六座

風雅

ありてまづとていふこと日小まのふり

正三位知康

新拾遺

つのもふとていふこと山に初これ後てをみぢけ綿とらん

正三位成國

拾遺

紅きちる後とていふこと山に初これ後てをみぢけ綿とらん

大僧正慈鎮

藤川百首

散一々も志川揚山とみぢけ綿とらん

後法華八道

後藤山

後藤山の藤ふあり高府内生土神とらん

源氏真

祭神本花開耶形命

左邊々辨尊 惣社 社内ふあり

奈吾屋祠

本社の中あり 奈神大山祇命

藤櫻山山いふふぬとて代ふびく奈とてありけ松風

後水尾院

奥原益軒五孀路起云ふ社ハ富士依間の新宮云延喜年中富士の本宮
吹くふ勸修寺本社二ふふにありて外ふ向ふ松社ふふふふ向ふ
山の宮ふ壇百四級あり同所あり山ふ穴ありそこちふふふ
ふ社の宮はくあり奈藤形大社あり日本ふく神社は奈藤あり半
日光孤等一と一後藤吹等二と一といふ社官ハ新宮在る惣社
宮内とてあ人のありと書り

圓山

後藤山山の藤ふあり福田寺といふ駿河記云慶長五年の秋
園初將軍家ふちふ入るセあり奈師奈山ふふとて 尊徳あり

まの爲とて丸山とてふれの弁袋と勢とある社にあり

流之弁

寺造あり 溪川の
流泉也

別雷社

府中西の方ふあり一説云延喜式内大歳御祖神社是とて
風土記小雷の宮あり

神とてや志川とていふこと山に初これ後てをみぢけ綿とらん

太田道隆

清水

府中安東村あり慶長の中奈師清水寺あり後藤とて
ふふ記を志ふ傍都の他ふふす賜士勝軍地藏毘沙門天候とて

名産阿倍茶

府中の小二里許足久保とてあり歩るまづの江戸あり用ひ
上方宇治信樂ゆ録

駿河のゆや花摘も茶の匂ひ

足久保親音

足久保村は明寺ありはち曹洞の禪刹とて奈師記を
ひう大修正基七体ありあり其基一七其内ふふ

麻櫻山

府中の小の方を里許ふあり今土人後畑と書り
一説ふ相模園といふ

名考

東と云ふ所の山ふさるおを本々めみちた海へたり 倭舎云

焼津神社

府中の南三理海濱焼津村住士神と云 延喜式内之
和名抄の益頭郡と焼津の地名と云 焼津は日

本紀 万葉集等云云
古事記 相模園と云

景行天皇四十年冬十月日本武尊初至駿河其處

賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂

林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有

殺王之情王謂日本武尊也放火烧其野王知被欺則以燧

出火之向燒而得免云王所佩劍藜雲自抽之薙

斂曰草薙也藜雲此云茂羅玖毛王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅

之故号其處曰燒津

古事記曰 入坐其野余其國造火着其野故知見欺而解開其

姨倭比賣命之所給囊口而見者火打有其裏於是

先以其御刀薙撥草以其火打而打出火着向火而燒

退還出皆切滅其國造等即着火燒故於今謂燒遣也

日本紀秘抄云日本武尊東征の神附道と枉く伊勢大神宮黍禮一
體命より授らる神劍の囊口は解開し向ひ火と打出し賊衆を
滅し退さゆふ囊の事旧本裏書秘文云

燒津邊吾去鹿齒駿河奈流阿陪乃市道尔 春日藏首老

相之兒等羽裳

神皇正統紀曰 景行天皇四十年夏東夷を征く彼く名境内かゝりたりれり又日本武尊の

皇子御遺は吉備武彦大伴武日と云右將軍とて相副しあゆふ

十月小枉通く伊勢於神宮ふりて大倭命に依り申はふは令神劍を授て

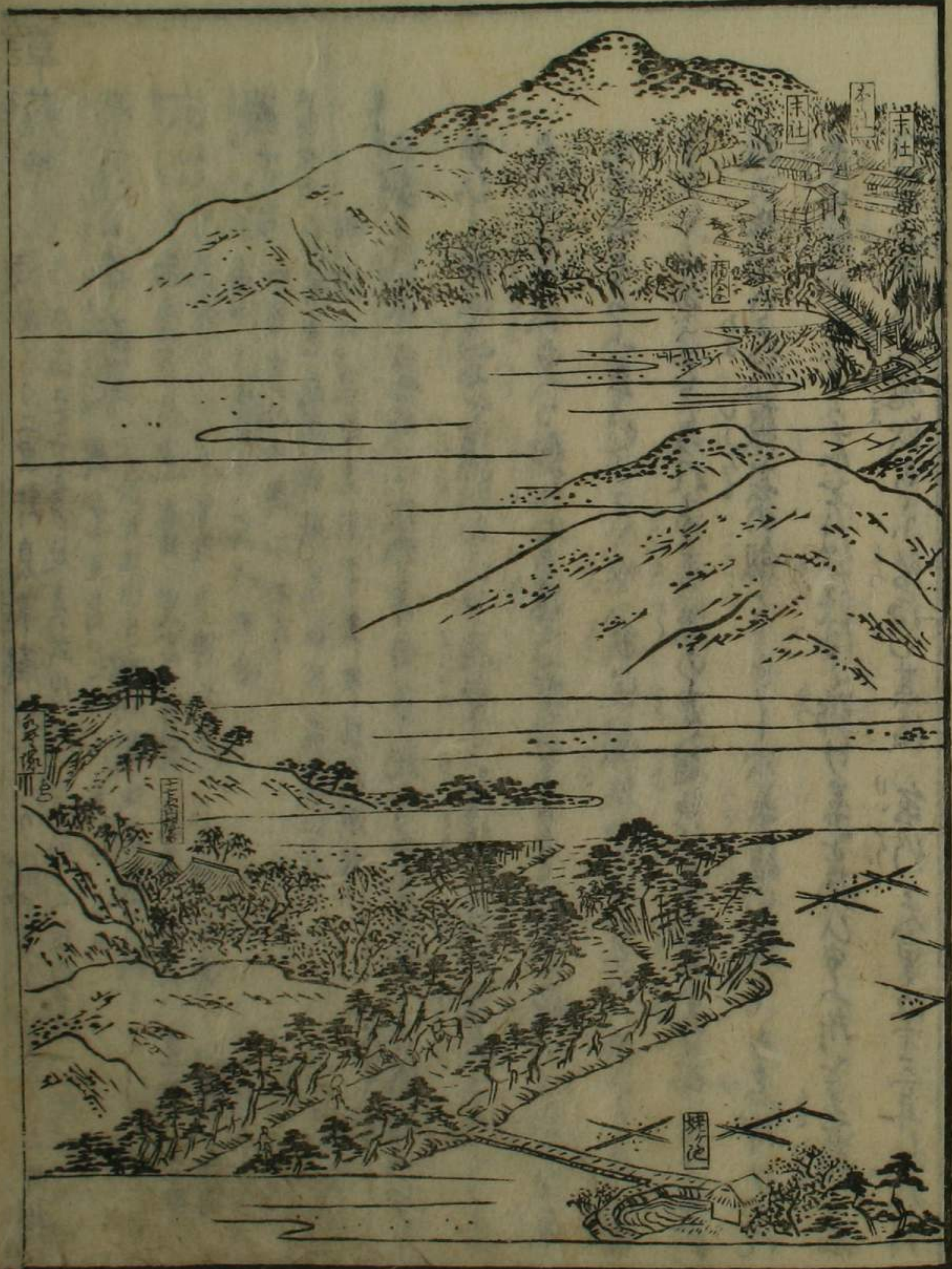
謹てねとて重とて教ひひる駿河ふ至る賊徒野ふ火出付て害しやん事

汝討まらり火の勢ひ免れむと云ふ佩る藜雲乃劍みづくむひて側の手は

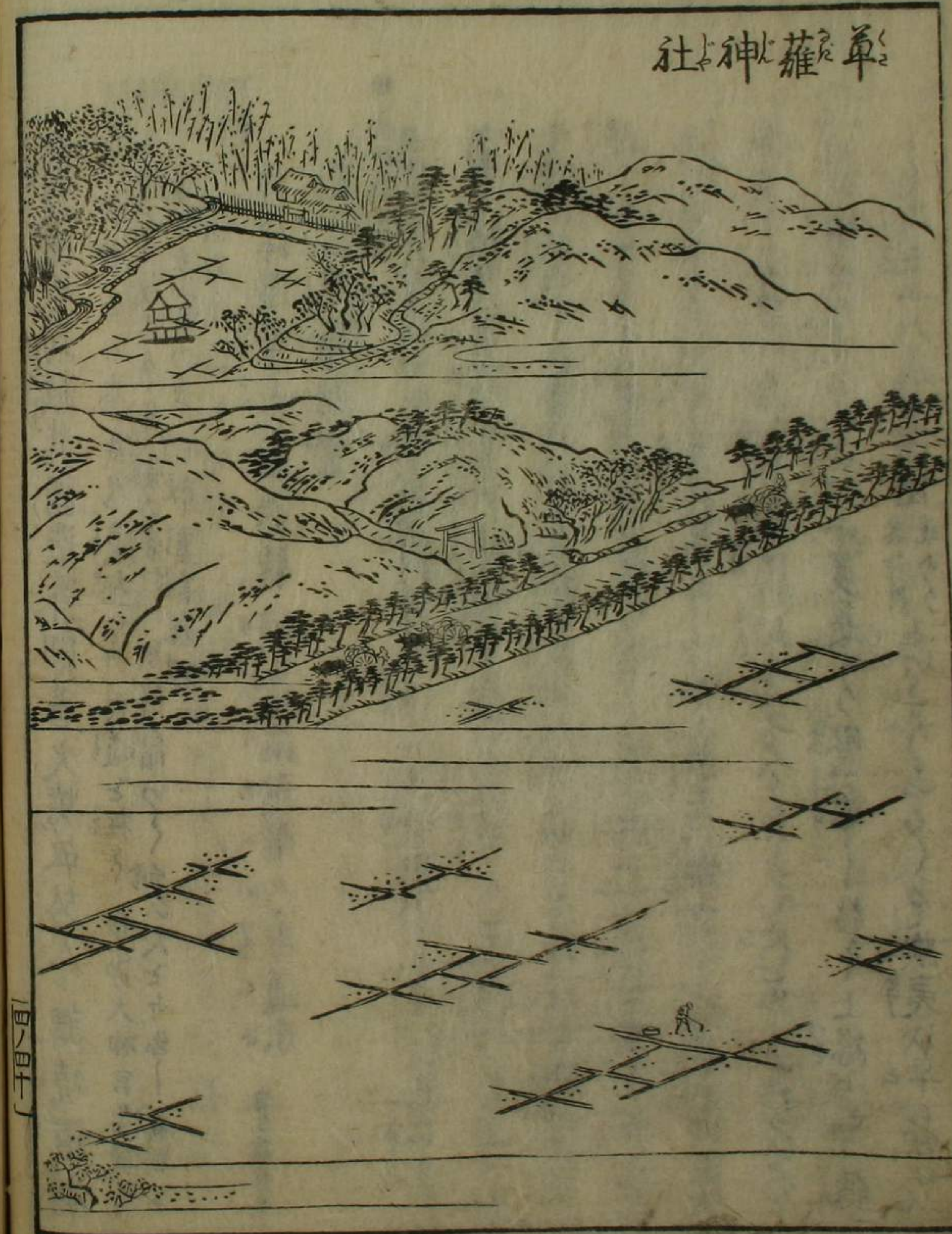
あささくふ是より名を改て藜雲と云ふ火うちて火と出してむひたを

つけて賊徒汝焼む為され小麥是より取ふ常し結く上総ふ至る轉

して陸園ふ入高身人の園 其神具 説のり 小いころふとく々 蝦夷汝平らげゆふ



社神薙草



四八十一

草薙神社 駿府より二里許東草薙村あり海濱より入る千五町織

祭神 日本武尊 例祭正月七日六月十五日

末社 本社を右に方内宮 賀茂 牛頭天皇 子安 八幡 山神 天神

楠大樹 社頭を右の側あり 高サ一丈八尺周八丈余

丙辰紀行 欲為黎民解倒懸東征到處幾山川 羅山

日本武尊東夷征伐の事日本紀小見之るゆゑ吾輩固小なり

ゆひし耐い色をて逆賊ちの原野火を放つ尊は焼殺せん

くれを尊佩ぬる劍はぬを遠くをまげまをて依るい懐のと謙とと

ちておそらふ事れてく唱(後)は劍はゆりゆりあつたり乃茶

てくくあぶさるられあ夷賊の方(烟)をびさ尊や恙もあま

叔と孫初いたれ藜老の劍とやせし松葉の劍と名はけられ

尊は焼むとさるる所とは焼は跡けを拂ひゆ所を草薙と名

づけて尊は荒魂返さる多ゆ其後 室乃天皇五十二年秋八月

又皇群郷小詔して曰眞日本武尊は征せし國郡巡視せん

直小車駕返夷ゆあま川伊勢ゆり東小入る九月廿日に鑿路

停免され尊は神靈鎮め其所を天皇原とつ初ゆし西小神社あり

一が天正十八年官家た合あつて移し再興ある所は洗川を右東

小あり毎年九月廿日杵形紫さく條松杵の形やして神依り社家より

者子け家々配るされい 天皇は清香を遺しあ遺風之都て社頭及び村

中れ土地みる星色の土ふして灰のゆ一樓を逆徒征伐の時茶と薙

拂ひ向ひ火燵ゆりて殺しあ兆れんとさられらる

梶原景時墳 狐塚の東岩原のたの方梶原山ありまふ並山ちさく奥

寺の其一俵又又嶮路次十七八町ゆれを景時自殺場とく九輪の石塔

あり又名馬標馳まると其時馬の喰ひたる列標とてま町のあり

今小笹の標洋馬踏石盤水石多あり山下小龍泉あり

又山中小標馬踏石盤水石多あり山下小龍泉あり

持念作のゆ意繪視者本奉とん

東鑑大意 正治二年正月梶原平三系時為園一宮お後とさるへが將軍頼家

今憎まれ奉りて子息家子に相具し上洛に馳せ見聞を其由
所に甲乙人的と射りて西集りし途中を以て代も多し馳走りて
むん々怪之氣を射りて小握原に狐崎を以て合せて遂に軍に成なる
原小次郎飯田五郎吉香小次郎存中を以て所に武士先を進て戦ひたるやいふ
握原宗茂はみる封れぬ是より國中に兵ども大勢ありて責をれば宗
國景宗宗則宗連も討死しなり景時宗季宗高叶いどと云ひ後の
山小駈入く獲十文字に搔切てさび小多り領て其首をとりて大路をさとり
つ後を馬に蹄小けて事村お朽果さう握原の相山はう一本に中しり
を藤原依殿に賜けたり陰使やうのて頼朝々天下に伝さるゆひ
めは宗時宗時と傳て威と海に小擧せり殊に安否を智める人ありて
侍大将と名のり平家退討れ為小西海小部源廷尉と逆擧れ争論小面目
と失ひ義経依殿一なる其酬てとんと申り其に廷尉ありしや
範頼源家徳代のうら多く滅亡したるのみる山宗時政子息宗時

が姦計小よゆと我あう後なる
あうあうの程あつる本陰ふる高き横上り目おたのしむる家あり
人小尋ねれを握原が墓と称し言ふ道のりたりしと云ふ
おもに基中納言れ口をさき終りたる年く小春の葉れあひたりといふ
侍ひひとれは是又古の家ありあは名をいれは後にも衣之羊を傳
がたとあつらねどもあつる人いひくも洞と云ふはまんの握原と
將軍二代の國おあり武勇三夏の名は得たり側お人ありてなるといふ
あまのありたるかこのいれさうはくはく小身孤獨つらむと云ふ家お
れびひとほども延んたるおもひたる都地方馳せりたるはと云ふ駿河國吉川と
云所ゆく頼れおたりと云うはあつて有たりと云ふは合されたる
齋岐は法皇廢所都の勢ありて白峯と云ふ所をさきを極しくあは
所おと西行修りしはほのでおんまうとていりやあむの西行所と
てもおらんのもおんせんともありたるはまうとてあははのめ

石船いしかふねふかくい地ふらなり其舟ふね昔神むかしのかみと成なり山路やまぢの之坂このさかふ石船いしかふね
儀法ぎほうと号なづは彼海峯山あまのうみねは服はく冬ふゆ南方みなみより山やまへ飛とて有縁ありゆかりは山やま小導せうどう
宇度うど漢かん六品りくひん天面あまのまへ地ち小得せうとく舞ま舞まはは漢かん小海せうかいをりむう一いつ猶なほ河か
たまたまといいく人ひとの漢かん查さ其下そのしたに樂がくはたして舞ま舞まはたして舞ま舞まはたして舞ま舞ま
たり又人の見みるはたして考かうのてく小飛せうとて雲くも小隠せういんふなりそそ依よ依よはこれた
一面形いめんがたと落おちせりちまふれはたりて寺てらは寶たからおとよよのて其寺そのてら小舞樂せうぶがく
なちては法會ほふゑは始はじめりたまふ子孫しよん舞人ぶじん氏うぢは二月十二日常樂にがつにじふにちじょうがく
會えとくち中ちゆうはたて其後そのご又人またひとゆり廻まわ雪ゆきの妻つまの花はなはたしてふたまり
曲まが風かぜの妻つまの姿すがたと夕ゆふの山やまは漢かんはたして松まつ小雅せうが琴ことをりはたして
づこあり又人の樂がくは今いますふたまり

独ひとりりしてはたとわがたまふもはたはたのあとの志こころを

補陀洛山之能寺

有度郡村松村ありどぐんむらまつむらあり江尻えしり駅えきより廿町
新義真言宗しんぎしんごんしゆ來きた達たつ院いんと号なづは坊舎ぼくしや十早じゆそう
本尊ほんそん千手觀音せんじゆくわんおん御中ごちゆうふ藏ぞうせ

境内けいん小茶師堂せうぢしだう 齋さい堂だう 鎮守ちんしゆハ十二所じふにじよ権けん現げんは終しゆうり 其外そのほか 権けん何なに祠でら
荒神あらいがみ祠でら 鐘樓かねたう 二玉門にぎよくもん 北藏堂きたざうだう等らうあり
我われれ當山あたやまと推古天皇おほみか所ところ宇う久能忠仁くねちぢにん卿きやう駿すま河かの園ゆゑん守しゆ小任せうにんト高たか園ゆゑん小
下したの府田ふりだ獵りつ一いつハ深山ふかやま山やま入いる所ところ小老杉せうらうしん株くさたり金龜きんきの光ひかりあり始はじめと
のちとふれと探たづりたる小園せうゆゑん檀だん金きん長ちやう五ご寸すん許もとめふふ規ぎ堂だう音おんは得とくか金きん特とく
のちハ膳ぜん小結せうむすト和仲院わちゆういんと管くだて安やす年ねん一いつたり百町ひやくちゆうの田園でんゆゑんは喜捨きせつして寺てら座ざ
とにあり夜よ八旬はつじゆんの老僧らうそう香かう深ふかの袈裟けさは掛かく久能くねはた松まつふままく我われハ補陀ふた
洛山らくせんの海土うみつちたり夜よ危あや生のなまふふふ小水せうみづくく現げんをといひ終しゆうりて差さ覺かくじ故ゆゑ山やま
彌や彌や補陀ふた洛山らくせんといひ本願ほんがんの名なはたして久能くね寺てらとあり厥その后のち百四十年ひやくしじゆねん法ほふ應おうて
聖せい老らう七しち年ねん大僧だいそう正せい行ぎやう基き菩ぼ薩さつ海かい肉にく巡めぐ廻まわの砌せきまま小立せうた基き金きん像ざうと胸むね中ちゆうに
藏ぞうてみづみづくくふふ大だい悲ひは像ざうと彫ちゆう布ふして安やすは今の本尊ほんそん是こゝ高たか寺てらハ凡ふん索さく
の塔たつふして士し峯かみハ鮮あざやして愛あい鷹たか箱はこ根ね二ふた子こ山やま近ちかくハ薩さつ施せの妙たう人ひと田でん子しよ浦うらは
地ぢ電でん法ほふ見み関かん清水しみづは淡たん入い江えと走はしる真帆まほ行ぎやう帆ほ漁りしよの舟ふね所ところくくふふちちく
二ふた徳とくの松まつ原はら真ま妙たうふして出で像ざうとハツ頭かつづかといふいふふちちくく眺ながむの屋や一いつ



村松
久能寺

駿陽
張子画

西ノ四十五

二保
松原
二徳
神社
羽衣松



四ノ四十七

信濃
産所
色紙取

そまふた二保の
仲付

羽衣松
浦の松原

兩院一品大宰相
典仁親王



二獲小酒しまた明神の神籍小載す所の英徳神社是に羽衣の松とて
ひうしえたりて女れをりては松原に羽衣松とてと漢まのちりひ得る
事り川れの文をさらん人のあひふの徳固法所が有彦彦ふたの羽衣
まうしきてとよめるいこれるる二保の駿河國彦彦郡小あれをり

草約 氷肌 神女 容聞 名 自 十六 問 遺 蹤
渾人 洗耳 是 何 曲 仙 袂 飄 風 入 松

羅山

東行紀録日

尾州亞相義直卿之保れ系神れ事見向せりる二保れ明神ハ

仲哀天皇ありと神書と考まひ二徳津姫をへし高彦彦

それ神女も大己事そふ娘しあんとて夫より下しあそ名給ね

ひひては羽衣けりて夫れ夫れりたる物語是明ありと神主お

せば何とはさるにづが又大宮れ神主より傳へる縁起一卷 仲哀天皇

あふよ一つふありいのをばい國の日本武尊と記し中所多々

其濟ふて天下治めたまふ天皇ありしに祀り中因縁も有べし

まび二獲松原ハ吾嬬路あわく名くる勝地ハ一古人の秀録を

久徳宇彦彦より東へ連りたる出嶋之其間幸重翁ふて明漢れ松あり
短さあり唐さあり狭さあり中々救ふれ松の縁をゆきふ枝葉汐風
小吹さらされ高さあり低さあり直多あり曲れるりりそき急如
窈ろしてふれ英人紅粉と粧す一夜ふ笑ふか一邈ふ東おれ方を
見渡せば名ありと富士の高根愛鷹れ翠巒あやの原清ヶ原吉原蒲
原れ驛落岫山興津川れ流れ清見南清見寺の清れ聲を悠揚り
月小清霜小牙より田子の浦端と漕舟を松の梢と走るか疑り
小舟の清水れ漆板しく入船りり出船あり渾れ家打とあふく奥
夢る夢の器一南と滄海洋々して大鵬之ふ里の羽をう川傍あり
荒原浪小ま深川口の蛇をる海士潮らむ後女みまをりてり業
れのをばぐり川をわつれあふるらあ 明漢れ中ふ字あり波瀾
漢ハ頭れ洲寄戌支尻宇津之呂貝清をいふを中央ふ二獲神社支
中社頭ハ神さびく鳥籠の洛ハ羅山ふれ書れしとて羽衣の漢ハ羽衣

藤原定氏
藤原のこぬこれ漢の友をりゆみ川へ舟を發せりて

現存六帖
風吹をよみて波を以て後海にまぬみの漢の舟もゆりて

角田川
角田の川は藤原の御時川と云ふ人云足利
御時川は藤原の御時川と云ふ人云足利
御時川は藤原の御時川と云ふ人云足利

伊豫物語の角田川の御時川と云ふ人云足利
あり大和名所圖今ふんくり澄月を掛ゆり紀伊と云ふれ大和

紀伊の國隈ありて
井蛙抄

都をさふもあれや藤原の角田川系も名を絶せりて
源家長

藤原やまこに糸は後海にびく見れとおぬ浦りる
源家長

家集
さみさ川の風をりゆり舟を發せりて

清見の関ふさまそり舟を發せりて
大納言 實房

忘れまは清見が関は波るより裏てさへ三保乃浦に
中務少輔王

清見の関ふさまそり舟を發せりて
大納言 實房

忘れまは清見が関は波るより裏てさへ三保乃浦に
中務少輔王

新法撰
清見の関ふさまそり舟を發せりて

関の戸のまを明あて清見海をりゆりて
今上御製

さよみく後ゆりてひり着てかと関ふさまりぬるこの舟
僧正行意

さほらりんふ身をもゆりてさよみく後ゆりぬるこの舟
法橋願昭

駒をりてさほらりぬるこの舟
中臣祐直

さやある名とはさくを清見の関ふさまりぬるこの舟
法橋願昭

身いさぬかちやゆりぬるこの舟
從三位保季

わけぬれと波のゆりぬるこの舟
從三位保季

清見海國をえさる旅人のさほらりぬるこの舟
從三位保季

草庵
清見海國をえさる旅人のさほらりぬるこの舟
從三位保季

清見寺寄
今の清見寺の舟
田口益人

万葉
清見寺寄
今の清見寺の舟
田口益人

清見川
今の清見川
田口益人

清見浦
今の清見浦
田口益人

清見浦
今の清見浦
田口益人

清見浦
今の清見浦
田口益人

ま本

大なるものゆありとまらるる月を清見が浦乃秋也

大藏の有家

清見^{きよみ}瀉^{せき}

今此清見浦のべ一瀉也
以瀉瀉水又傾也也

新古今

ちたふと秋と知く秋とを清見が浦乃秋とわづはるはる

従二位家隆

日

見一人の傍より清見が浦乃秋の波のつよひは

泰盛雅経

風雅

清見が浦乃秋の波のつよひは

皇太后宮

新拾遺

清見が浦乃秋の波のつよひは

従三位行平

千首

清見が浦乃秋の波のつよひは

権大納言

月桂

清見が浦乃秋の波のつよひは

後三条藤原

十一首

清見が浦乃秋の波のつよひは

前太政大臣

清見が浦乃秋の波のつよひは

清見が浦乃秋の波のつよひは

何伴

清見が浦乃秋の波のつよひは

四ノ五十三

清見が浦乃秋の波のつよひは

清見が浦乃秋の波のつよひは

巨鷲山清見國禪寺求玉院
本尊正觀
諸佛宅
上と同前
朝鮮人青螺山人書

永世孝享

客殿縁側の秋阿彌佛額
珠人齋孫朝陽の筆

諸佛宅

上と同前
朝鮮人青螺山人書

足利尊氏公像
珠人求玉院大和尚公大居士又山中不は境あり

客殿畫
獅子
開山堂
山開基聖禪師の像

護國禪師像
今川義元の伯父の聖齋長老と号す

自覺聖智禪師像
山開の右ふ安び

龍虎兩軸
書院小掲の物
衡立画
表名佛
裏紅葉

石浮屠一基
客殿の
山梨氏の碑
文畧

同一基

高寺山あり
鑿云處山一居士慶安二己丑年

國田中清元
八月十五日
生國參州岡
寺僧云は人の郎原合觀の時石田光成

夫此禪刹也世名高
後山嶺巍々々々
啼を聲

本小して四時小花
實は花形毎々小変れる

梅の客殿のありて枝の流れ
其例小無絲梅あり

頃公ひ芬々々々
羅浮の夢小を芳

泰陽公主代
書院乃在中
飛泉あり

泉と名づく
牛石虎石龜石

國初將軍家
鑿清見
兵器四あり

尖刀を
其外寶

并ね
女

く卿相の表
客萬國

もろもろの茶店に裁きみぬ塩漬の夕陽に煙籠りたる
と寂々として風流のよみありしなり月夜名をよみぬ
磨赤石もをびらるる務色之謝荘の月の賦ふ白雲空ふ暖く
素月天の流るるを賛せしむはわりの事あり

清見寺十境 當山十一世閑庵和尚稿

峻嶒高閣倚祇林直對松原十里臨大海風烟
連慢卷諸天鐘鼓傍波沈鶴遠聲落應真錫霜
後月明長者金十歲依然形勝地將令騷客此

投箸將軍石在山峯

尊公陣跡澗之濱石古名存苔自新雀啖漚西

三萬天扶漢運五千人鼓聲合磐城浪旌

蒨色迷櫻野春維昔將軍茲所想老松風雨鬱

海邊花木五雲輿櫻在補陀岸上憑風靜潮音

隨梵吟天昏樹色掛龍燈五佩空中響銀

漢仙槎月裡昇坐想人間難可到鼇峯鐘磬度

峻嶒分境亭在山巔

絕頂樓閣霄漢間清秋此日一堪攀洲前暮色

三峯雪樹抄人家四水灣引雨總分龍爪發交
波欲動驚頭山雄風須賦披衿客不是蘭臺興

詎三保然浮海潮中存古廟畫蕭羽衣松掛

平楚蒼然浮海潮中存古廟畫蕭羽衣松掛

飛霞似山朝夕陽一半漁村晚天樂時聞月

裡簫生塔客殿西云北塔境

湧出瑠璃界塔標落海中攀梯過鳥道卷幔倚

龍宮尺五天城雪烟霞巴水東勝因隨所化色

相是真空觀音堂名

亭巖腰亭觀音堂名

欄還藤蘿外潮光戶牖間魚龍吹浪出舟楫傍

晚此占閑庭中瀑布

九曲懸崖上銀河下碧霄潺湲穿樹杪細落

芭蕉疑入匡廬岳也攀鳥鵲橋許由不洗耳此

地無煩敵巨盧岳也攀鳥鵲橋許由不洗耳此

馬影橫沙晚淚痕袖浦濤蘆花連斤鹵紅樹照

林皇江白風頭促月低舟楫高凄其多旅思沾

三保從西出正東田子洲江雲分駿豆嶽雪照

春秋山向五原起波連七澤流澳熊風化在猶
詠古人謳

今日の清見寺に尊輿孤きあつた妻は夕波静小むひふ之保の
松系るくはりまゆその景りくもさうあり

浦風の吹くもそは清見寺は多みふ波きく三木の松系

悪詩をいぢりてそよそよの傍小作りて位持ふんせむれは半りてわ顔の

絶妙新詩聽更佳推儲酬和隔天涯
芳聲驚世京花客嘯月吟風伸雅懷

わくわくは波さしめりて浦前小めまふ付る御物信あり

希奥の發句はりうまのれとあれと

月よふくにあふまれ名清見寺
のあそびにさしめ遠のゆふ波

うきを瀧くあそびさそひてさそりて浦縁

名あめて今宵の月波清見寺さそひてさそりて浦縁

清見寺の一夜の月波清見寺さそひてさそりて浦縁

は紀元の寛永十二年の以二條殿の左桐府若公烏丸亞相光彦卿あそび
おぼやりの侍使小吉妻あそびの紀元とまのあそびのあそび

丙辰紀元

清見関と延暦は頃奥州の逆賊高九駿に圍まて攻入るの園小陣孤

そりて坂上將軍討破りて高九駿退く半久くを語り傳へたり

は比所お寺のりある惠日山乃長老の才子開聖のちとひく

清見寺と名づけ又の巨鯨もいり近頃妙心寺小属さそひてさそり

経歴巨鯨山入門心自開禪徒今住寺
冠賊昔攻三保窓禱裏大洋机案間

起鞭征馬去斜日照人顔

貞應海道記

清見の園孤見れ西南の天と海と高低をくの小橋をさそりて東北

冬山と儀や峻難同く足城はまの磐石の下は波の花風小知くまの

さそりてあそびあそびの松の色みりてあそびあそびの松の色みり

あそびのあそびあそびの松の色みりてあそびあそびの松の色みり

てまき名松得るあそびあそびの松の色みりてあそびあそびの松の色みり

月ふらけらば耳目乃感さそりあそびあそびの松の色みりてあそびあそびの松の色みり

登小道松を松風をくあそびあそびの松の色みりてあそびあそびの松の色みり

藤嶋山

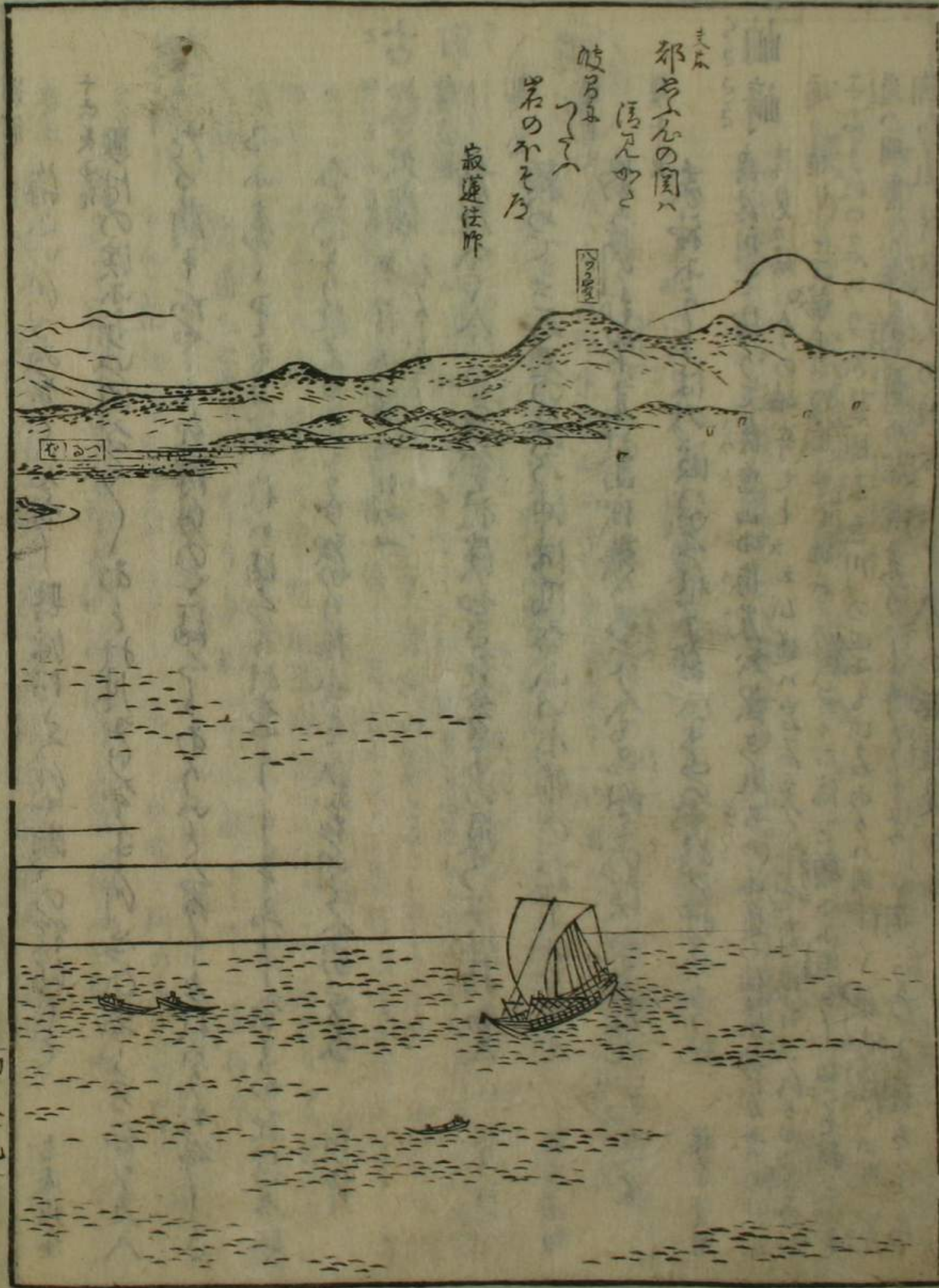
彩後屏
岸をたふ
やうな神
傳はる
ありま
ゆけと
波の園
佐藤信吉



藤嶋山

三山
邪心園

信見
岐
つて
岩の
巖蓮法作



四十九



薩摩山
 東嶽
 石倉
 茶店
 新區土
 鮮
 東海道
 風景



富士川

駿河富士郡の郡治にありて名を日平紀不盡河と書けり
其の源は信州八ヶ岳より流れ甲州に到り諸流會一ははらなる
其の流はゆるく道中花の香満しらの幅あるの流城やりの際限なき
其の流はゆるく道中花の香満しらの幅あるの流城やりの際限なき
其の流はゆるく道中花の香満しらの幅あるの流城やりの際限なき

舟より富士の川夜に目を善ねる事なきは元浮橋が東
如家 辰末基改

朝日さしたるひけみ音を聴てたちもあはれなりト乃川音
家隆

浮橋ふ竹のうりはるきとてとあひあはるぬ一の川波
法眼慶融

峯のりえあつて水さふ一川のワれも浮雲散まきせり川らふ
清原深喜又

吹おろき音あつてくれを白妙ふまきと我れおく一の流
前大納言 為家

浦原浪立くはるふりば老馬ふさきとせり川の窟や馬ふあひは流
凡の肉射桓

さうりぬり後ふさびりくさとのせり野ふ草一はまきとるんかたはあゆ

先後わかれのり旅れ習ひもさひーられけりおまきる後富士川を流ぬ
けり申す事難く流流の巫岐れ水のせねん舟流の川にさる人の知れけり
よりもしさう一々も老馬流たのそお後る老馬一海にさるるれと
山路の音のそあつて川の水けさ後もよくわりのまきり

昔お笑一あつて山のワりさてまきとる富士川のお
辰末基改

舟のけりけり里流生る川富士川の水流たれりやと浦原までと人くひ
辰末基改

あつて日流さるる漕舟とて高根といはるる流はゆるく
辰末基改

舟十一日流あつてさう一ちる勢られけり川にさるる流はゆるく
辰末基改

富士川のワりさるるまきとる流はゆるく高根を雲あふり
辰末基改

舟ふさくつてさるる流一ちるる流はゆるく一樽流押出の時流り
辰末基改

西辰記

是るものなりと危うくおひ聖中の人目まひ魂乃消るを知らず

往來停馬此踰天下沿豈獨五口 羅山

河畔爲通名利路陪陵慙愧一樵夫

水神森 富士川右の山際あり巖上松栢生茂れりひ川を助

八十年あたり長堤とあり神の巖小築つけたりひら後水筋定りて法

水の時々は堤の内より流水流法へり

富士川あり古蹟 富士川の東平家理許の大沼あり

今の子孫徳ちいす所と云云駿河紀不若徳ち村今ひ今泉といふ

東鑑云 治承四年十月廿日 武衛令到駿河國

賀嶋給又左少將惟盛薩摩守忠度參河守知

度等陣干富士河西岸而及半更武田太郎信

義廻兵畧潛襲陣後面之處所集干富士沿

之水鳥等群立其羽音偏成軍勢之甚依之平

氏等驚駭爰次將上総介忠清等相談云 平

士率悉屬前武衛吾等愁出洛陽於中途已難

遁圍速令歸洛可構謀於外云云

平家抄治云 去後右左衛門佐原謀叛のよう 風安あり

有て今日も勢は付ぬさし不き付ぬさるへして大乃軍小松

権亮少將維盛副わの薩摩もろろ及侍大將お上總守忠清次は

とて都合二萬餘騎治承四年九月十八日新都次々

都不着一同と廿日東園へ我部れなる中略 十月十六日ひ駿河園

法見園小ぞ着申都と三三三騎馳て出せりも路次は兵付副七

餘騎と我安へ一茶陣の浦原富士川小進と後陣の

の屋小支たり中略 大將軍維盛東園の案内有て長并齋藤別當實

盛次ありて汝程は強引は兵東八箇園といふほどあざと向ひ

及別と嘲多君の實盛次大茶と云れいよ我僅十二束次仕

実盛後射は右八箇園の勢も我を兼とり兼者十五束小方

の惟は引強さ健者者れいんて張依等れ兵若射依

二三兩の容易ゆけは射徹い大名と申衆の者ひ五百騎小若て持

惟は馬小若と落の道と知り悪所と馳れ馬倒さる軍又

親も討れよしも討れよ死れぬ事なく戦ひは西國の軍と申の惣て
其儀いかに親討れぬ事は引退れ侍事孝養一志願て家子討り
その其意欲て家作の兵根米盡ぬも六年来田作り秋刈ぬ先
て家夏熱いと厭ひ冬寒いと嫌ひ東國の軍の凡て其儀い
修の儀其上甲斐信濃源氏等案内の如く富士に裾をり揃ふや
廻りいざらんや申せば大將軍此心懸せし勢もせんて申やや
思われらんを候ては惟るは但軍の勢は多少のより申さば大將軍此業ふ
あるとこそ申傳へいと申れば是は御聞兵共皆さへ慄と敢りたり去程ふ
同二十四月卯の春富士川ゆく源氏の矢合と我定たる二十日辰辰ふ
今平家共兵とも源氏の陣と見渡せば伊豆駿河の人民百姓皆軍ふ忍れ
敵の野ふ入り山中隠れ或は舟に乗る海に浮ひるを營に火は見えたる候ある
夥一と源氏の陣は遠火の多きよ實小野も山も海も何も先武者く有
たるいせんを和らされたる其夜の夜半討富士の沼小築も有る水もさ

もがゆふの騒ぎたりらん一夜ふをり立ち羽を打雷大風をとの様小園(け
れ平家の兵とも源氏の大勢の向ふたるは此の夜別高り中は平家小甲斐
信濃の源氏等富士の裾をり揃ふ廻り惟らん敵は下着る有らん
敵籠られての叶ふまど爰とば尾流の側候に防げ申そ取おもむ
敢ん我先ふくやぞ候りたる館り小園章嘯く弓取者の矢と志は
恙さる者い弓と志は源馬ふらん人々の馬の我糸繫る馬も馳て馳
れば株は續る事候る一其志二迫さ宿くたり遊君遊共にも日集光
遊ひ酒盃一々々敵の頭は踏破られ敵の腰折られく喚び叫ぶ事
夥一同二十四月卯の春源氏二十萬騎富士川に押寄て天も響け
大地も震ぐ針小園を三箇度仰りたる平家の方を定めたるをせは人
入く見えれば皆歸て休と申に敵の故の志は鎧取てある者もわりの敵ハ
平家共捨るたる大幕をて帰る者も有り九平家の陣の蠅を食翔り休
りて中兵衛佐辰志と馬より源甲斐脱手水船御取して王城の方



富士川水鳥
 劫平家大軍

狩野縫殿助藤原永俊圖


伏せよされ全頼朝が私の高名不非に偏ふ八幡大菩薩の所討ひて七言ひ
たる聴く亦取所されなく駿河國とは一條次房忠頼遠江國の安田
三島義定小頼らる猶も續く責むりしつても後も流石覺末あ
そく駿河國より鎌倉へを帰られたる義首ふ

富士川の瀬々の岩こぼれあよりももろもある伊勢平氏哉

相國の所あやて平承祐依の事ありし平氏水多の羽を小鷲て逃
去し富士沼の事あて今け若徳寺ハも所之齊藤別當東園小鷲兵

多し平承祐りしふより平承祐はむも臆病神のけまてつものあくらん
所あふゆる其次所依て辨士依りて故の美を誇せむる事あれ無依ふ
しるは是こと信せざる事も且今の授ふ玉者耳ふまきりて費人作る

關國中分源與平東方氣勢盡豪英 羅山

曾我兄弟赤丸舎

曾我兄弟赤丸舎 富士川の東平原のたけ山原原とつ所あり士人曾我八
幡あり十鳥祐成と高崇院を奉崇殿良善としひふ鳥時宗次鷹岳院士山

曾我兄弟赤丸舎 富士川の東平原のたけ山原原とつ所あり士人曾我八
幡あり十鳥祐成と高崇院を奉崇殿良善としひふ鳥時宗次鷹岳院士山

首洗水首懸取あり抑建久四年五月廿八日我兄弟曾我八幡の所
狩の藤鑑井出の屋敷小推察一又の故工後在藤門尉祐経依討友辨
直石の侍又十餘人を切す之百八十餘人ふも孤負せたる祐成ハ仁田四房
忠常ハ討れ時示と五房丸ハ生捕らる頼朝々直ふも細沢安一ハ
て寛仁の御土心ありといふも祐経ハ坊子頼朝申あより終小鷲
又ハやくり小虎神の香舎もあり祐成ハ死の處出あして流
用ひひやくり空一ありとあるん云傳人作る
曾我物語云
工後在藤門尉祐経ハ益明の酒小酔ねれ故の入りとあざざりてあ後も
あざざりたる十房松明信あざざり益松ふまよりたれがふ筋ハ筋中せり
たる多敷のお將忠頼をいふ武人の遊君同席中あよりたれを解りの多
さふ事もせは足すれハハ祐経と申あ並て各目と目を各うらうらわし
たる我々存せある二の年ハ一夜花宴実ある西王母の園の柳優曇長うら
らしくそれお存せある故あれハ早斬れやと二人のたか依祐経申あてハ引引
ていあて七八度まであより良のつ時示は年月のあひ只一たかふと
あひはるる死罪れらる十鳥時宗次ハ度入る者取切ら死人を斬ふ
同ハ死さんとのそた力切切と祐経がもとああ何ぞ在藤門尉知る見義

馬
溪

虎
山
新
卷